琉球大学学術リポジトリ

ダウン症児のコミュニケーションにおけるオノマトペの機能

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学
	公開日: 2007-07-17
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 神園, 幸郎, Kamizono, Sachiro
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/889

ダウン症児のコミュニケーションにおける オノマトペの機能

神園幸郎

The Function of Onomatopoeia for Communication in the Children with Down's Syndrome

Sachiro KAMIZONO

はじめに

ダウン症児（以下、DS児と略す）は、様々な能力領域において発達障害を示す。当然のことながら知的な発達にも遅れが存在し、言語発達も遅滞する。Benda（1969）[2] によると、DS児の話ことばは、普通、始歩より1年ないし2年遅れて出現し、歩く前に話し始めることは希であるとされている。また、始語の出現時期は、DS児の精神年齢（以下、MAと略す）で期待される時期よりもかなり遅れて出現することが指摘されている（Share, 1975[17] Greenwald and Leonard,1979[4]）。DS児はこうした始語の遅れやその後の語彙獲得の遅れに加えて二語発語の獲得も遅いため、乏しい語彙に基づく一語発語の時期が長く続くことになる。このように、DS児の言語発達の遅れは他の精神遅滞児に比べて重篤であるといわれている。

DS児の言語発達遅滞の原因については、音声模倣の技能の劣弱性を指摘した研究（例えば，Mahoney, Glover, and Finger, 1981[11]）、前言語的行為のうち象徴機能と伝達機能の社会的使用に係わる行為の障害を指摘するもの（例えば、長崎・池田、1982[13]）、さらに構音動作の予備的プログラミングの困難といった聴覚一音声系の機能障害を指摘する研究（例えば、Zekulin, Gibson, Mosley and Brown, 1974[22]；Dodd, 1975[3]；Sommers, and Starkey, 1977[18]）などがある。したがって、DS児の言語発達を促す指導法も、言語発達遅滞の原因として指摘された上記の諸機能の充実を目指した働きかけが指導の中心になっている。しかしながら、こうした視点に立った系統的で持続的な言語指導によって、一語発話が可能となり、語彙量が次第に増加しても、DS児には次の段階である2語発話の獲得という大きな言語発達上の壁が存在する。2語発話に向けて、従来、口頭模倣による発話指導（例えば、Jeffree、Wheldall, and Mittler, 1973[6]）や，非音声的な言語模倣（例えば、サイン）を利用した発話指導（例えば、Kotkin, Simpson, and Desanto, 1978[9]）が行われてきた。しかし、これらの方法に対しても2語発話の定着性の問題や新たな記号体系の習得に伴う負担の大きさ、訓練期間の長さといった問題点が指摘されており、指導法としての適切さに欠ける点が多いようである。

筆者は、これまでの研究から、言語発達遅滞児の中でも、とりわけDS児は、いわゆる擬音語や擬声語（onomatopoeia以下、オノマトペ）を伴った言語情報を用いることによって交信機能を高めることができるとの印象を得ている。すなわちDS児に話しかける時、成人語で話しかけるよりも幼児語、とりわけオノマトペで関わると反応性が高く、なおかつ意思の交換が円滑に行われコミュニケーションが拡大する。また、DS児間の交流

Dep. of Special Education, Coll. of Education University of the Ryukyus

＊本研究は平成3年度文部省科学研究費補助金・一般研究（C）（課題番号 01510071）によって行ったものの一部である。

場面でもオノマトペやオノマトペ様の音声による関わりが頻繁に観察される。こうしたことは、DS児がオノマトペをコミュニケーション手段として積極的に利用している可能性を窺わせる。

ところで、語は音と意味が結合したものであるが、両者の関係は恣意的で本来自然に結び付いたものではない（Saussure, 1959[16]）。音と意味の自然的な関係がみられる場合、つまり、音そのものが意味を表象することを一般に音象徴（Sound symbolism）と呼んでいる。オノマトペはまさにこの音象徴語に他ならない。したがって、意味や概念の抽象化能力に乏しいダウン症児にとって、音から直接に意味を喚起できるオノマトペは彼らの言語能力の劣性を補う有効な手段となっている可能性が高い。また、構音機能の劣弱性を示し、かつ聴覚－音声系の機能障害を指摘されているDS児にとって、オノマトペに特有な音韻構成による韻律的特徴は彼らのオノマトペ使用を促進させている要因の一つと考えることができる。井上（1987[5]）は「オノマトペは具体的、かつ感覚的である。強い力があって読む者を「場面」へ、「現場」へ、引き摺り込む。」と述べている。このように、オノマトペはコミニュケーション場面における話し手と受け手の情緒的な一体感を醸成する機能を持っているのかもしれない。DS児のオノマトペ使用の背景には先に指摘したオノマトペの音象徴性や韻律特徴に加えて、コミュニケーション場面におけるオノマトペ独自の語用論的機能も存在しているのかもしれない。

DS児に対して、オノマトペに身振りや行為といった非言語的情報伝達手段を随伴させることによって、より高次な交信手段の形成が可能になるとすれば、彼らの情報獲得量は飛躍的に増大し、その後の行動や学習に対して二次的効果が期待される公算が強い。さらに、高次な言語運用階段への移行が円滑化される可能性も高い。なおかつ、こうした交信手段は先に指摘したDS児に対する言語治療アプローチに比べて、適性処遇交互作用の観点に立った、より自然で無理のない言語指導の方策をもたらす可能性がある。

本研究はダウン症児に出現するオノマトペがコミニュケーションにはたす役割を明らかにし、オノマトペを利用した新たな言語指導の可能性を探るものである。

方　法

1．対象児

村田（1968）[12]によればオノマトペは1歳から2歳にかけての一語発話期に多く出現するとされている。対象児を選定するにあたって、村田の指摘を参考にした。そこで、言語発達年齢とりわけ発語の水準が1歳ないし2歳に相当するDS児を対象児として選定することにした。沖縄県内の幼稚園、小学校の特殊学級そして養護学校に在籍する6歳から10歳の中度精神遅滞のDS児を対象に遠城寺式乳幼児分析的発達検査、絵画語い検査、新版K式発達検査そして田研・田中ビネー知能検査を対象児の実態に即して（必ずしも全員がすべての検査を行えたわけではない）実施し、発語が1歳から2歳の発達年齢にある対象児を抽出した。さらに、言語以外の発達領域の発達年齢が2歳台（2歳0カ月～2歳7カ月）3歳台（3歳7カ月）そして4歳台（4歳2カ月～4歳7カ月）に分けそれぞれA群、B群、そしてC群とした。最終的にDS児群はA群が3名、B群が1名、そしてC群が3名の計7名（男：5名　女：2名）になった。

表1　対象児の内訳

	対象児	年齢	遠城寺式乳幼児分析的発達検査					
			移動運動	手の運動	基本的習慣	対人関係	発語	言語理解
ダウン症児	A1	6: 4	1:10	1:10	1: 7	1:10	1: 3	1:10
	A2	6: 0	3: 6	2: 7	2: 7	1:10	1: 1	1: 7
	A3	6: 4	2: 7	1:10	3: 2	2: 7	1: 3	1: 5
	B1	7: 5	4: 2	3: 6	4: 8	2: 4	1:10	2: 7
	C1	8: 0	4: 6	3:10	4: 8	3: 6	1:11	3: 6
	C2	9:11	4: 0	4: 4	4: 8	4: 4	2: 0	4: 8
	C3	10: 1	4: 8	4: 4	4: 8	4: 8	2: 0	4: 8
精神遅滞児	a1	11: 0	2: 0	1:10	2: 2	2: 2	1:10	2: 3
	a2	6: 0	3: 0	2: 6	2: 0	2: 5	1:10	2: 0
	a3	8: 0	2: 8	2: 4	3: 6	2: 7	1:10	2: 4
	b1	5:10	3: 9	3: 6	3:10	3: 6	2: 1	2: 4
	c1	6: 3	3: 6	4: 2	4: 6	4: 2	2: 4	2: 4
	c2	10: 7	4: 6	4: 2	4: 2	4: 7	2:10	2:10

MR群の対象児は上記のテスト・バッテリによってDS児群の言語以外の領域における発達年齢とほぼ対にして抽出された。なお、C群は対象児の選定ミスにより1名少なくなったが、DS児との比較検討に支障はないものと考え、あえて追加はしなかった。したがって、MR群の対象児は6名であった。

対象児の内訳はほぼ全対象児に実施できた遠城寺式乳幼児分析的発達検査の結果に基づいて表1に提示してある。なお、その他の検査結果は表1に示した各対象児の発達年齢との間に大きなずれは認められなかった。したがって、表1の発達年齢に基づいて群間比較を行っても大きな問題はないものと判断した。

2．音声および行動の収録

学校や幼稚園の生活の中から、自由遊びや休み時間などの自由場面における対象児の行動を1場面につき30分間づつ2ないし3日の間隔をおいて2場面収録した。収録場面は原則として第三者（あそび相手の子どもを除く大人や観察者）の介入のない場面に限定し、収録の際は対象児の行動を制限しないように配慮した。行動はビデオカメラで収録された。音声については対象児の音声を明瞭に収録するために、対象児にワイヤレス・マイクを装着させ、マイクからの電波をFM受信機で捉えて録音する方法を採用した。

3．トランスクリプトの作成

収録されたテープのうち収録開始から10分間を除いて残り20分間の分析の対象とした。したがって、対象児あたりの分析対象時間は40分間であった。当該の40分間の行動と音声は自作の記録用紙に書き写され、トランスクリプトが作成された。

結　果

1．オノマトペの出現頻度

オノマトペの判定は、丹野（1981）[19]および天沼（1973）[1]の分類基準を参考にした、なお、慣用的なオノマトペと音韻的に一致しない音声についても、当該の音声が出現した前後の行動の文脈的把握によって明らかに「あるものの状態およびあるものの発する音」を指示もしくは、そのまま音に写していると思われる場合は、オノマトペと認定した、オノマトペの認定にあたっては、当該の音声が指示する意味について、3名（筆者とトランスクリプト作成に携わった2名）の判定者の全員の判断が一致することを前提とした。

図1はDS児群とMR群について、各個人ごとに全有意味語に占めるオノマトペの割合を示したものである。DS児群におけるCI児の割合が他児

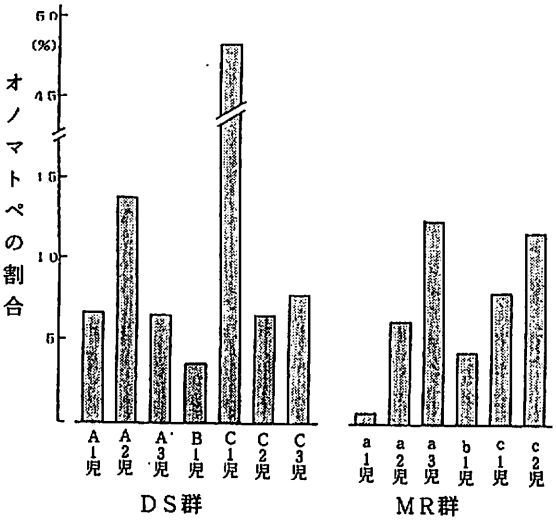

図1　全有意味語に占めるオノマトペの割合

に比べて際だって高い値を示している。本児の収録場面では、周囲に動物の遊具が多数置かれており、他児の自由場面とは大きく異なった環境であった。本児の遊びは、小動物の選好性ともあいまって、2場面とも“動物ごっこ”に終始し、したがって動物の鳴き声にまつわるオノマトペが多数を占めることになった。しかしながら、本児のオノマトペの種類は、他児と大きな違いはみられなかったことから、本児の結果は、オノマトペを誘発しやすい場面依存的な特徴によるものとみるべきで、本質的な差異を示すものではない。

両群を比較すると、群間に顕著な差は認められず、また、両群ともに発達的な傾向も読み取れない。全般的に両群ともに全有意味語の5～10%程度をオノマトペが占めていることがわかる。両群とも発達に伴って有意味語の数は増加し、DS児群とMR群の対応する発達年齢にある被験児の有意味語数はほぼ等しい値を示した。ちなみに、DS児群とMR群の発達年齢ごとの総有意味語数

は次の通りであった。すなわち、DS児群では発達年齢の低い順にそれぞれ108語、230語そして256語であり、他方、MR群では同様な順にそれぞれ101語、248語、そして241語であった。

一般にDS児は認知発達に比べて言語発達が劣ると言われているが、総有意味語数を指標とする限りでは上述の通り、認知発達が同水準にあるMR児と差はなかった。ただ、語彙量や統語機能面においては、明らかにDS児群はMR群に劣っており、とりわけC群においては、その傾向が顕著であった。DS児の発語の特徴は同語反復が多く語彙量が少ないことであった。DS児はC３児でわずかに２語発話が見られるものの、発達的に高いC児においてすら１語発話の段階に留まっている。これに対して、MR群ではA３児で既に２語発話が認められており、明らかにDS児は認知発達の水準に比べて統語的な発達に遅れがあるとみてよい。

２．オノマトペの音韻

オノマトペの音韻的なタイプをみてみると、両群ともに概して、A児では／P／，／b／といった両唇音を含むX：Y型（ex. ／パーン／、／ブーン／バーン／，etc.）がほとんどを占めているのに対して、C児ではXYXY型（ex. ／パタパタ／，／ベタベタ／，／ガタガタ／，etc.）の４拍畳語形式が最も多く、XYt型（ex. ／ペケッ／，／ドロッ／，／パカッ／，etc.），XYn型（ex. バタン／，／ドタン／，／ガタン／，etc.），その他の型といったように多様性が認められた。それぞれの型の割合は、慣用語としてのオノマトペの型の出現頻度と類似していた。さらに、C児はA児に比べてオノマトペの音調、音の強調、そしてリズムといった超分節的な要素の多用する特徴があった。他方、発達的に未熟な段階にあるA児のオノマトペは、まだ喃語からの派生の色合いを多く残している。A児において比較的構音の容易な長音の使用頻度が高くなっているのは、彼らの発音技量が未熟であることによるものと解釈できる。DS児群のC児では、DS児に特有な構音の不明瞭さは依然として残ってはいるものの、超文節的な要素を駆使しているために、一般言語に比べて比較的オノマトペの明瞭性は高かった。したがって、DS児に出現したオノマトペは構音の発達や認知発達をよく反映しているといえる。先述したように、総有意味語数に占めるオノマトペの割合は発達的に違いは認められなかったが、オノマトペの型や構音上の特徴については明らかな発達差があるといえよう。

３．コミュニケーションにおけるオノマトペの役割

出現したオノマトペがコミュニケーションにおいてどのような機能をはたしているかをみるために、若葉ら（1975）[20] の行動機能的分類に基づいてオノマトペの分類を行った。

分類項目の定義は次の通りである。

１）社会的言語行動：言語によって他者との対人関係が成立している。

(1) 自発的発話：他者からの言語的働きかけは先行せずに自ら話しかけたもの。

(2) 応答的発話：他者からの言語的働きかけに応答して発したもの。

２）自己中心的音声言語行動：音声言語を発してはいるが、他者への働きかけや、他者からの応答を期待せずなされるもの。

３）認定不能：音声言語行動であるが、１）２）のいずれであるのかはっきり認定できないもの。

図２は、オノマトペを上記の定義に基づいて分類した結果をDS児群とMR群について個人ごとに示したものである。

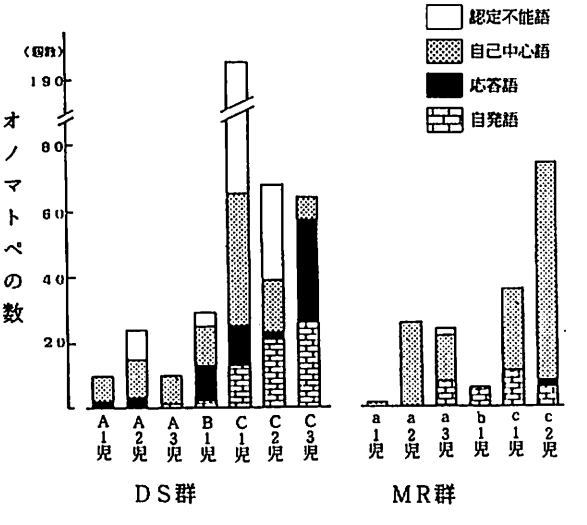

図２　オノマトペのコミュニケーション機能

先に指摘したように、総有意味語数に占めるオノマトペの割合に発達変化は認められなかったが、オノマトペの実数は発達的に増加していることを示している。

DS児群は応答語としてのオノマトペがA児から既にみられ、発達年齢が高くなるにつれてその数が増加している。とりわけ、C児では自発語としてのオノマトペも増し、オノマトペが社会的言語行動として機能していることがわかる。このように、DS児群ではオノマトペの機能が発達的変化を示したが、MR群ではどの発達年齢においても自己中心語が大半を占め、発達年齢に伴うオノマトペの機能的な変化は認められなかった。

図3はDS児群のオノマトペのうち、その指示する意味を同定できなかったものについて、上記の社会的言語行動に基づく機能分類を行った結果である。図2の結果と同様にこの種のオノマトペ

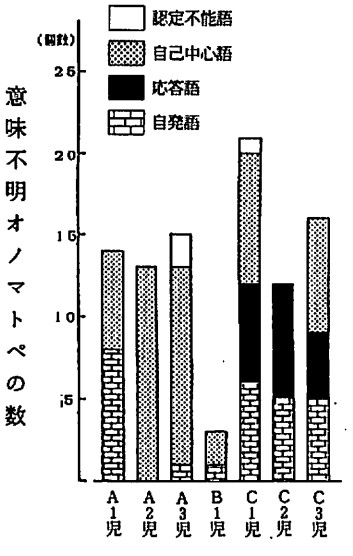

図3　意味不明オノマトペのコミュニケーション機能

も発達年齢が高いC児では他者とのやり取りの場面で使用されていることがわかる。ところで、判定者がオノマトペと判断した音声のうち、その指示する意味が特定できない時は、次のいずれかの場合である。つまり、話し手と聞き手の間にオノマトペで指示される意味のやり取りが存在するが、第三者にはその意味が理解できない場合、そして話し手と聞き手の間で何らの意味のやり取りは行われていないが、いかにも両者の間に意味のやり取りが行われているように見える場合である。後者はコミュニケーションの表層形態のみを保持している，いわゆる、疑似コミュニケーション（pseudo-communication）であり、DS児では日常よく観察される行動である。仮に、図3で示したオノマトペがこの種のものであったとしても、原初的ではあるにしろコミュニケーションにおける語用論的な理解が成立しているとみることができる。以上の結果から、C児はコミュニケーションの手段としてオノマトペを有効に利用していることがわかる。

次に、明らかに同一の事柄および事象を表していると思われるオノマトペを分析してみた。類義語として使用されたオノマトペが指示する意味の種類数と、類義語としてのオノマトペの種類数(延べ数)を、DS児群とMR群の対応する個人ごとに示したが表2である。表から明らかなように、圧倒的にDS児の類義語の量が多いことがわかる。

表2　類義語としてのオノマトペ

DOWN	A1	A2	A3	B1	C1	C2	C3
意味の種類	2	3	1	4	6	6	7
オノマトペの種類	4	13	3	15	55	30	30
MR	a1	a2	a3	b1	c1	c2	
意味の種類	0	2	2	0	3	1	
オノマトペの種類	0	5	5	0	9	7	

特に、C児においては、1つの指示対象について、なんと18種類もの異なるオノマトペの音声を用いている者もおり、更に、これらのオノマトペが交信活動に多用されていた。こうした結果からも、DS児がコミュニケーションにオノマトペを有効に活用しようとする意図が汲み取れる。

表3は、各DS児に出現したオノマトペを以下の基準で分類したものである。

A：動作や状況を説明するもの
B：自分や他者の動作によって生じる音
C：物の発する音
D：人の声
E：動物の声

F：その他（A～Eのどれにも該当しないもの。他者の発したオノマトペを受けたもの。）

Aは、いわゆる擬態語に相当し、BおよびCは、擬音語、DとEは、擬声語に相当する。擬態語と擬音語の生成の背景となる認知的機能には、異なったメカニズムが存在するものと考えられる。つまり、擬音語は、その指示する音が外界に存在するのに対して、擬態語の場合は指示する音が存在しないという点で、その表象形態および象徴機能との関係で大きく異なった背景を持つものと考えられる。一般に、擬態語は擬音語に比べて、表象水準の質的な違いがあり、表象の発達を顕著に反映する側面があるものと考えられる。

こうした観点で、表3を見ると、C児、とりわけC3児における疑態語の種類が他児に比べて多く、表象機能の質的な水準の高さが伺われる。特に注目されるのは、状態の表象に加えて、自己の内的状態（”怒っている”）の表象にまで及んでいることである。さらに、擬音語についても、特に、ものの発する音（C）が発達とともに多くなり、物質世界との多様な関わりが多くなっていることを示している。以下、各個人が生成した具体的なオノマトペを吟味することにする。

表3　DS群におけるオノマトペの種類

対象児	A	B	C	D	E	F	語類
A1		倒れる ぶつかる 唾を吐く		泣き真似		叩く	5
A2	じゃんけん	拍手 かむ音	車の走る音 車の飛ぶ音	咳の真似	犬		7
A3	回転	息 回転音	車の警笛 車の飛ぶ音 合体の音 車の走る音		にわとり		8
B	投げる	転がる音 かむ音	笛の音 終わりの合図 走る合図 ピストルの音	恐怖の声 吐く音	犬 猫 にわとり 怪獣	おなか	14
C1	飛ぶ 投げる	かむ音	合図 B，G，M 汽車 笛の音	あくび	犬 やぎ 猫		11
C2	滴腹	叩く 拍手	スイッチの音 汽車 ホッチキス音 笛の音 ブザーの音	泣き真似	犬の吠え声 犬の息	おなか	13
C3	手を下ろす ずっこける 回す 怒っている ボール投げ チリを捨てる 立つこと	叩く 拍手	正解の合図 誤答の合図 起立の合図 笛の音 ブザーの合図 スイッチ音 車の警笛 走る合図				17

A：動作や状況を説明するもの　B：自分や他者の動作によって生じる音　C：物の発する音　D：人の声　E：動物の声　F：その他

C1児は、猫の鳴き声を数種類の意味づけをして使用している。たとえば、甘えた声で教師に擦り寄りながら／ニャー／，／ニャーニャ／，手を押しやりながら（こっちに来るなの意）／ミャオー／，／ニャオー／と／オー／の音のストレスを置いて発音する。また、犬の場合でも、その吠え声／ワウワウ／が、他児に対して怒った時には歯を見せながら／ウー／となる。C2児では、さらに微妙な表現が可能となり、四つ這いになり、舌を出して／ハッハッ／（犬の息の意）「猫ちゃんネンネして」との教師の指示に対して、頭を振りながら／ニャッ／と拒否の表現を行う。さらに、C3児では、一緒に遊んでいた子が行ってしまったことにすねて／ビービー／（行っちゃだめの意）他児が本児のオモチャを取ろうとしているのに対して／ビビー／（取っちゃだめ），さらに、おやつのスプーンを他児に配るのか聞く為の質問の場合にも／ビビー（語尾の音調を高くして）／，また、他児が隣の子を叩くのを見て、手を交差して×（バツ）をしながら／ビビー（だめの意）／と表現する。このように、動物の鳴き声やブザーやチャイムの音を指示するオノマトペが、本来の意味から離れての特定の意味を指示するものとして使用され始める。こうした新たな意味の抽象化は、対象児が置かれている状況、例えば、動物ごっこやゲーム遊びといった場面で、子どもの興味や関心の対象となるオノマトペに対して起こるようである。例えば、問いかけに対する返事が、動物遊びでは、／ニャン／，／ワン／となり、ゲーム遊びの場面では／ビー／，また、拒否の発話意図は、動物遊びでは，／ニャオー／，／ウー／がゲーム遊びの文脈では／ビビー／といったように変化する。つまり、自らの発話意図が現在進行中の遊びの文脈に即したオノマトペに翻訳されていることを示している。

考　察

1．DS児群のコミュニケーションにおけるオノマトペの役割

DS児群とMR群の対象児は、言語の表出および理解の発達を除く他の領域の発達年齢について

それぞれ対にされているが、言語発達については両群に大きな違いが存在している。つまり、DS児群においては言語理解の発達年齢に比べて発語の発達が著しく遅滞し、特にC児においては1歳6カ月から2歳8カ月ものズレがあった。一方、MR群ではこうしたズレは存在せず、言語理解と発達年齢はほぼ同程度であった。DS児群においてオノマトペが質的に高い言語運用の様相を示すのは上述した言語理解と発語の発達的ズレに起因する可能性が考えられる。

ところで、健常児においては1歳から2歳にかけて多くのオノマトペが出現する。こうしたオノマトペの出現の背景について、村田（1968）[12]は次のように指摘している。すなわち、1歳から2歳の時期には子どもの興味や関心の増大に伴って自らの欲求を伝達しようとする意欲や意図は高まるものの、伝達手段としての音声言語のレパートリーが充分でないという“需給のアンバランス”状態が存在する。そして、この状態を緩和するため、あるいは、音声言語の不充分さを補完するための手段として、身振りや表情などの非言語的情報伝達手段に加えて、オノマトペが使われるようになるというものである。また、この時期は、母親から幼児に向けて発せられるオノマトペを多く含んだ“育児語”が活発になる。このことも幼児がオノマトペを使用する契機となっていると考えられている。

本実験で対象としたDS児はまだ2語発話の段階に到達しておらず、表出レベルでの言語発達は、1歳台に留まっている。これに対して、表出言語以外の認知発達は、加齢とともに発達しているために、先述したように言語発達と認知発達の差は発達年齢が高くなるにつれて大きくなる。この現象は先に指摘した1歳台の健常幼児と類似した様相を呈しており、DS児におけるオノマトペの発生とその運用様式の機序として健常幼児の場合と同様な解釈が可能であろう。ただ、健常幼児と違うのは言語以外の認知発達が充実しているために、1歳台の健常幼児における要求行動と4歳台におけるそれは質的に大きな違いがあり、当然のことながらオノマトペの運用面における機能の違いをもたらすことになる。DS児群のC児のおける社会的言語行動としてのオノマトペの割合が高いのは、そうした認知水準の発達に裏打ちされた対人接触や対社会的関わりの豊富さが、交信活動や談話への適用といったオノマトペの運用面における付加的な機能充実をもたらしたためであると考えることができる。こうした特性は、DS児群に特有な現象とみることができるであろう。これに対してMR群のオノマトペは、C児においてすら、専ら独語としての自己中心語に終始し、談話のようなコミュニケーションとしての機能を有していなかった。MR群はA児からすでに2語発話期に達しており、要求伝達に関して、オノマトペに依存しなくても済むような状態になっている公算が強い。もし、そうだとすれば、MR群のオノマトペがDS児群のように付加的な機能充実に向かわないのは、当然であるといえるかもしれない。

2．オノマトペがコミュニケーション手段となる条件および背景要因

なぜオノマトペがDS児の交信手段として積極的に使用されるようになるのだろうか。以下、3つの視座から考察を進める。

1）オノマトペの音韻的特徴

一般に、オノマトペを構成する音は喃語や初期の模倣音声との音韻的連続性を持つものが多いため構音が容易である。さらに、オノマトペの中には、畳語形式の音連鎖を持つものが多く、音韻的冗長性が高いために音連鎖の保持が容易である。こうしたオノマトペの分節的な特徴に加えて、それらが表出される際の音調やリズムといった超分節的な素性が豊富であるという特徴を有している。こうしたオノマトペの音韻的な特徴は構音障害を持ち、さらに聴覚―音声系の機能障害を指摘されているDS児にとって、構音の容易さをもたらしていると思われる。事実、DS児は成人語の比較的短い語を音声模倣する場合であっても音の省略が生じるのに対して、モーラ数の多いオノマトペでもほとんど省略が起こらないという指摘がなされている（大貝，1985）[14]。

2）オノマトペの直接的な意味の換起性（音象徴としてのオノマトペ）

オノマトペは音声そのものが帯びている性質が直接、ないしは象徴的なやり方で意味を伝える側面がある。言語音の直接伝達性あるいは象徴性は、従来から音象徴（sound symbolism）として知

られてきた現象であり、オノマトペはこの音象徴性が高いことが指摘されている（川田，1988）[8]。この音象徴は、「鳴り響く意味」とも形容され、音声そのものが指示対象に直接的、直観的印象を与える働きを担うとされている。したがって、オノマトペは”イメージ喚起のポテンシャルが高く”（苧阪，1986）[15]”聞く者の感性にじかに訴え、一気に核心に迫らせる”（川田，1988）[8]といった、情報伝達力の高いことばである。こうしたオノマトペの特徴は概念の抽象化能力の乏しいDS児にとって意味理解を促進させるように機能するものと予想される。

言語研究においては、語音と意味の関係は恣意的であるために（Saussure、1959[16]）記号論的な接近が主になる。一方、オノマトペでは音と意味の有契的な関係が存在するために、単に記号論的な視座のみでオノマトペの指示する意味の本質に迫ることは難しいと考える。そこで、オノマトペの音声の変化とその指示する意味の関係を音象徴という観点から捉えてみることにする。

まず、前出の動物の鳴き声についてのオノマトペで、甘えた声での／ニャー／、／ワンワン／が、”こっちに来るな”との意味で／ニャオー／、／ウオンウオン／と変化する。つまり、通常の鳴き声が拒否の意を伝える場合には、／0／音が挿入される。／0／音は、大きいもの、重いもの、強いもの、といった音象徴性を持つと言われている（Jespersen、1922[7]）。こうした音象徴性を用いることによって、拒否の意図の強さを表現しているとみることができる。また、音韻変化による音象徴性に加えて、／ビビビビー／のように同音の反復によって、拒否の大きさや強さを表現するといった別種の音象徴的特徴もみられた。この現象と関連して、音韻のような分節的素性に加えて、音調やリズムや強調といった超分節的要素も意味の弁別素性を表すものとして随所にみられた。例えば、前出の例で、愛着行動に伴うオノマトペと拒否の意図を表すオノマトペ、質問の意味を表すオノマトペは分節的には全く同じ素性を持つが（ビビー）、超分節的素性は、それぞれ異なっていた。こうした特性は、オノマトペの産出のみならず、分節的には不明瞭で奇異な音連鎖からなるオノマトペの理解においても、意味の了解を促進するように作用すると思われる。

音象徴性や超分節的素性の活用は幼児期初期からみられ、さらに、異言語間にもある種の普遍性が存在するということから、言語経験の問題というよりも、子供が本来持つ性質に帰せられるという指摘がある（村田、1968）[12]。言語発達の遅れたDS児においても、この特徴は、明確に保持され、オノマトペの産出と理解の両面において、有効に援用されていると言えよう、Lenneberg（1967）[10]によれば、DS児が音声模倣に困難を示すのは意味理解が難しいためであるとしている。彼の指摘に従えば、上述したように一般言語に比べて意味を理解しやすいオノマトペは、音声模倣が容易になるであろうと推察できる。前述の大貝（1985）[4]が指摘した事実はこのようなオノマトペの意味理解の促進性にも支えられているのかもしれない。

また、興味深いことにオノマトペを発している時の対象児は、豊かな身振りや表情を随伴していた。オノマトペの意味の伝達には当然こうした非言語的要素もコミュニケーションの媒体として有効に機能し、情報伝達力を高める役割を果たしているはずである。恐らく、オノマトペのリズミカルな音韻構成やオノマトペが表象するイメージの躍動性などが上述した非言語的媒体の背景に存在しているであろうことは容易に想像できる。こうした、非言語的情報伝達手段とオノマトペの関係については今後検討しなければならない。

3）オノマトペの語用論的特性

オノマトペの音韻特徴や音象徴による意味喚起の容易性がDS児のオノマトペ使用を促進させているとの上述の指摘もさることながら、DS児のオノマトペの大きな特徴はそれらがコミュニケーションの媒体として使用されることにある。コミュニケーションが成立するためには、送り手と受け手の間に、話題ないしは、心理的“場”の共通が必要である。話題の共有”場”の共有を成立させるためには、その前に、”ヒト”と”ヒト”との出合いが前提となる。”ヒト”が”ヒト”に新たに関わる場面においては、認知的側面に訴えるよりも情緒面に訴える方が、関係を切り結ぶ際に有効である。山田（1988）[21]も指摘しているように、まず、“わかる”ことよりも”あう（出合う）”

ことが重要である。

この出合いの場面を保持したい時、他者からの問いかけに対してその意図の理解まで達することができない場合にも儀式的な反応を返したり、あるいは他者に対して意味を形成しないある種の音声を自発的に発して他者の注意や関心を引き留めておくといった行為がみられる。先に指摘したDS児の疑似コミュニケーションはまさにこうした機能を帯びているのであろう。さらに、この疑似コミュニケーションの手段として受け手の情緒に訴える力の強いオノマトペが使われているということは、DS児の対人関係の良好性と状況把握の的確性を伺わせる。恐らく、彼らは問いかけられた相手に対して何等かの形で働きかけることが、まずはコミュニケーションの基礎となる人との関わりを持続させるために必要であることを認識しており、対人関係を形成し保持するうえで相手の情緒に訴える仕方が有効であるとの認識にたってオノマトペのそうした側面をうまく利用しているものと考えることができる。また、DS児はその場の状況に合わせて適切でかつ有効なオノマトペを選択して使用している（たとえば、拒否をゲーム場面では／ビビー／、動物あそび場面では／ニャオー／といったように）。このことはその場が持つ認知的制約性を的確に把握でき、それらをコミュニケーションに有効に利用できるとの主体側の認識が背景に存在していることが前提となる。そうすると、DS児はコミュニケーションに関するかなり高度な実用論的（あるいは語用論的）能力を備えているといわねばならない。

DS児におけるコミュニケーションの有効な媒体としてオノマトペが使用され、それらが高次な機能をもつのは、背景に上述した能力が存在していることによるものと考えられる。

参考文献

1）天沼　寧（1973）：擬音語・擬態語辞典　東京堂出版

2）Benda, C. E. (1969) : Down's syndrome : Mongolism and its Management. Grune & Stratton.

3）Dodd, B. J. (1975) : Recognition and reproduction of Words by Down's syndrome and non－Down's syndrome retarded children. American Journal of Mental Deficiency, 80, 306－311

4）Greenwald, C. A., & Leonard, L. B. (1979) : Communicative and sensorimotor development of Down's syndrome children. American Journal of Mental Deficiency, 84, 296－303.

5）井上ひさし（1987）：自家製　文章読本，新潮文庫

6）Jeffree, D., Wheldall, K., & Mittler, P, (1973) : Facilitating two-word utterances in two Down's syndrome boys. American Journal of Mental Deficiency, 78, 117－122.

7）Jespersen, O. (1922) : Language. its nature, development and origin. New York : Holt.（市河三喜・神保格　訳：言語－その本質、発達及び起源、1929，岩波書店）

8）川田順造（1988）：聲．築摩書房

9）Kotkin, R. A., simpson. S. B. & Desanto. D. (1978) : The effect of sign language on picture naming in two retarded girls possessing normal hearing. Journal of Mental Deficiency Research. 22. 19－25.

10）Lenneberg, E. H. (1967) : Biological Foundations of Language, John Wiley & Sons, Inc. , 1967（佐藤方哉・神尾昭雄 訳 言語の生物学的基礎 大修館書店 1974）

11）Mahoney, G., Glover, A., & Finger. I. (1981) : Relationship between language and sensorimofor development of Down's syndrome and nonretarded children. American Journal of mental Deficiency. 86, 21－27.

12）村田孝次（1968）幼児の言語発達．培風館，84－87.

13）長崎勤・池田由紀江（1982）：発達遅滞乳幼児における前言語的活動 －ダウン症乳幼児と正常乳幼児の要求場面での伝達行為の分析－ 発達障害研究，4巻，2号

14）大貝 茂（1985）：ダウン症児の言語指導 －音節省略の改善－ 実践障害児の教育，142,

－音節省略の改善－ 実践障害児の教育，142，42－45.

15）苧坂直行（1986）：擬音語・擬態語の感覚尺度（I）－ 連想順位表に基づく分析－．追手門学院大学文学部紀要．20．21－62.

16）Saussure, F.（1959）：Course in General Linguistics, New York：Philosophical Library（translated by Wade Baskin；original French edition, 1916).（小林英夫 訳 一般言語学講義　岩波書店）

17）Share, J. B.（1975）：Developmental progress in Dow's Syndrome. In R. Koch & F. de la Cruz (Eds.), Down's syndrome. New York：Bruner Mazel.

18）Sommers, R. K., & Starkey, K. L.（1977）：Dichotic verbal processing in Down's syndrome children having qualitati vely different speech and language skills. Amencan Journal of Mental Deficieny, 82, 44－53.

19）丹野眞智俊（1981）：Onomatopoeiaに関するPattern分類，佐賀大学教育学部研究論文集，29 (1)．

20）若葉陽子 他（1975）：言語発達遅滞児の追跡的研究(4) －チームアプローチの試み－ 特殊教育研究施設報告 8．

21）山田洋子（1988）：ことばの前のことば，新曜社

22）Zekulin, X, Y.，Gibson, D.，Mosley, J. L. & Brown, R. I.（1974）：Auditory－motor channelling in Down s syndrome subjects. American Journal of Mental of Mental Deficiency, 78, 571－577.